

平家物語と修羅能について (二)

On The Tales of heike and Shura-noh

三 谷 幸 子

さきに、平家物語を典拠とした二番目物の修羅能・略修羅物について、世阿弥の書きのこされた著、花伝書・能作書・花鏡などにより、二番目物の能のあり方などをとりあげ、出典平家物語の巻名と修羅能の曲名・後ジテなどを示し、簡略ながら名所旧蹟に触れたが、このたびは、登場人物について平家物語と能における修羅物とを比較しつつ紙面のゆるす限り論を進めてみたい。

出典の平家物語は富倉徳次郎著「平家物語全注釈」(角川書店刊)により、能楽については「大成版観世流謡本」に拠った。

一

まず、平家物語(源平盛衰記を含む)を素材とする修羅物・略修羅物の能二十六曲のうち、鬼畜をシテとする「鶴」と「羅生門」の二曲を省いた二十四曲について、シテとして登場する人物を、桓武平氏・

平家の人たち・源氏の武将たち・源氏の系流でありながら平氏に仕へた者、源氏・平氏に属さない者に分類して考察を加えることとする。

桓武平氏

平忠度(清盛の弟)・平知盛(清盛の子息)・平通盛(清盛の甥)
・平経正(清盛の甥)・平敦盛(清盛の甥)・平清経(清盛の孫)
・平知章(清盛の孫)

平家の家臣

平盛久

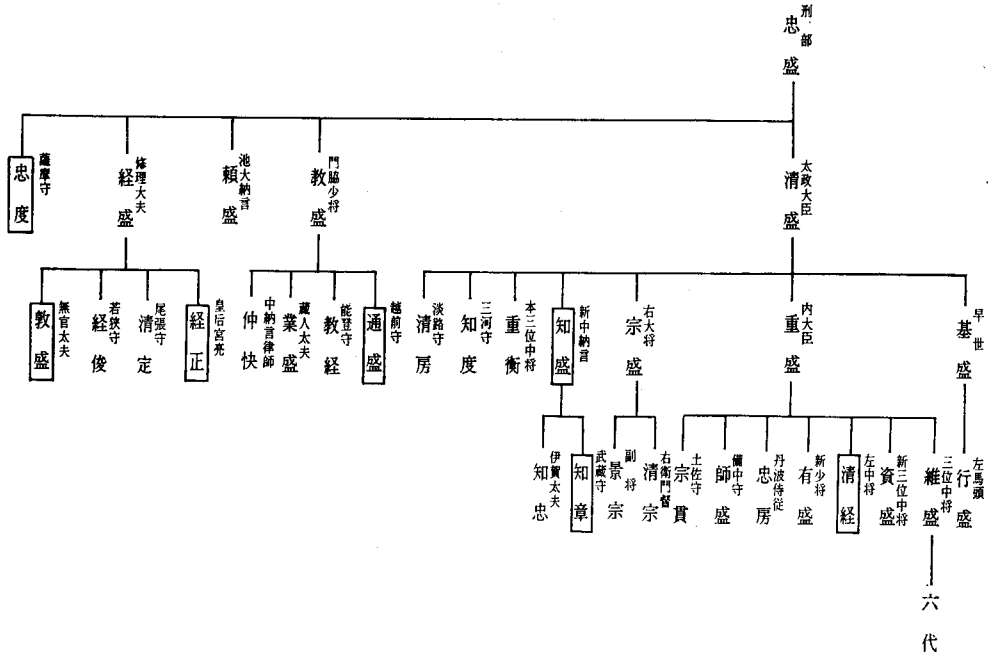
源氏の武将たち

源義経・武蔵坊弁慶・梶原源太景季・悪七兵衛景清・今井兼平・
覚明・佐藤忠信・土肥実平・土佐坊正尊(昌俊・正存)・巴御前
源氏の系流に属するが平氏に仕へた者

斎藤別当実盛・俊寛僧都・源頼政

平家物語に登場するが源氏・平氏に属さない者

源 仲国



忠度

平清盛の末弟として、天養元年（一一四四）に生まれ、寿永三年（一一八四）二月七日、行年四十一才で一ノ谷の合戦のおりに没している。忠度の兄弟は、現今では六人の男子が定説となっているが、源平盛衰記の巻一「兼家季仲基高家継忠雅等拍子附忠盛卒する事」の章には「忠盛朝臣子息あまた有りき。嫡子清盛、二男経盛、三男教盛、四男家盛、五男頼盛、六男忠重、七男忠度、以上七人皆諸衛佐を経て、殿上の交はり人更に嫌ふに及ばず。日本国には男子七人あるをば長者と申す事なれば、人多く羨みけり。」とある。平家物語に忠度が登場してくるのは、巻四「橋合戦」・「三井寺炎上」をはじめとして、巻五「富士川」・巻七「清水冠者」・「主上都落」・「火打合戦」・「俱利伽羅落」・「忠度都落」・「池殿都落」、巻八「小田巻」・巻九「薩摩守最後」である。官位は薩摩守・古兵衛佐・正四位下で、その生誕については、平家物語・巻一「鱸」に、

忠盛又仙洞に最愛の女房をもつて通はれるが、ある時此の女房の局に、つまに月出だしたる扇をとり忘れて、いでられたりければ、かたへの女房達「これはいづくよりの月影ぞや。いでどころおぼつかなし」など笑ひあはれければ、彼の女房

雲井よりただもりきたる月なればおぼるげにてはいはじと思ふとよみたりければ、いとどあさからずと思はれる。薩摩守忠度の母、これなり。にるを友とかやの風情にて、忠盛もすいたりければ、彼の女房も優なりけり。

とあるが、この最愛の女房については、長門本平家物語では「祇園

女御」となっており、源平盛衰記では、「祇園女御に宮仕申しける中藤女房」と記してあり、延慶本の平家物語では「丹後守為忠女」となっている。「平家物語全注釈」において富倉徳次郎氏が申されているように、語りもの系の古態を残すと考えられる『屋代本』では、特に「忠度母」との説明がないところを見ると、もとはこの「最愛の女房」については、忠度母の伝承と、祇園女御（またはその中藤女房）との伝承と両方があったものと考えられる。

このように、忠度は和歌にすぐれた優なる女房を母に持ち、また、忠度自身も千載集の撰者として知られた藤原俊成卿に歌を学び、秀句を残していることは、巻七「忠度の都落」によっても知られる。

—（前略）— 薩摩守忠度は、いづくよりや帰られたりけん侍五騎童一人、我が身共に七騎とって返し、五条三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名乗り給へば、「落人帰り来たり」とて、その内騒ぎあへり。薩摩の守馬より下り、自ら高らかに宣ひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申すべき事あつて、忠度が帰り参つて候。門をば開かれずともこの際まで立ち寄せ給へ」と宣へば、俊成の卿「さる事あり。その人ならば苦しかるまじ。入れ申せ」とて、門を開けて対面あり。事の体何とならあはれなり。

薩摩守宣ひけるは、「年来申し承つて後、疎ならぬ御事に思ひ参らせ候へども、—（中略）— 一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙らうと存じて候ひしに、やがて世の乱れ出で来て、其の沙汰無く候う

条、ただ一身の歎きと存ずるで候。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。是に候ふ巻物の中に、さりぬべき物候はば、一首なりとも御恩を蒙つて草の蔭にても、うれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ」とて、日来詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたる巻物を、今はとて打つ立たれける時、是を取つて持たれたりしが、鎧の引合より取り出でて、俊成の卿に奉る。—（中略）—

其の後世静まつて、千載集を撰せられけるに、—（中略）— 勅撰の人なれば、名字をばあらはされず、故郷の花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、読人しらずと入れられける。

さざ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな
其の身朝敵となりにし上は、子細に及ばずといひながら、恨めしかりし事共なり。

歌人忠度として、人々の心に強い印象を残す一段である。この段が、能では「俊成忠度」として取りあげられ、巻九薩摩守最後と前後して組まれ、西海の合戦で薩摩守忠度を打った岡部六弥太は、箆（尻籠）に結び付けられた短冊に、旅宿花と云う題にて「行き暮れて木のかげを宿とせば花やこよひのあるじならまし」「忠度」と書き付けられてあつたので、薩摩守と知り、六弥太は俊成卿を訪れて文武両道にすぐれた忠度の最後を惜しんでいると、俄にシテの忠度の亡霊があらわれ、千載集に「読人知らず」と書かれたことを怨むが、俊成卿は「朝敵の御名を頭はさんは世の憚りなり。よしやこの歌あるならば。御名は隠れよもあらじ。御心やすく思し召せ」と慰め、歌の六義を論

じ合っているうちに、シテの忠度は急変して修羅道の責苦をうけるが、まもなく梵天は「さざ浪や……」の歌に感じて劔の責を赦し、夜明け方になって、シテの忠度の姿は消え失せるのである。

本曲は、前段において歌人忠度を表現するべく、和歌も多くとり入れられているが、二番目物としての筋からみると修羅の巷が見せどころでなくてはならぬ。しかも、前段は、世阿弥の花伝書に提唱されているように「ことに平家のままに書くべし」を忠実に守っているようで、人々も親しんできた段であるが、後段の虚構の部分が前段と不自然に描かれている点で、曲趣の捉え方に困難を生ずる点は、先学の方達の指摘された通りである。

その点、能「忠度」は、同じく出典を平家物語・巻七・忠度都落事と巻九・薩摩守最後の段をとり挙げているが、和歌の道をたしなむ武将として、「花や今宵の主ならまし」の歌を中心にワキとの問答がおこなわれるが、後シテの忠度が「千載集の歌の品には入りたれども、勅勸の身の悲しさは読人知らずと書かれし事、妄執の中の第一なり」と語り、命を賭しての歌一卷をこの世に残すために、俊成卿の許にとつて返した歌に対する心の深さが、「読人知らず」とされたことに「妄執の中の第一」と言わせているのである。しかも、これは能の常とは言葉、ありし日の武将の姿で、忠度自身が亡霊となって告白するのであるから舞台における演能においても迫力がある。

六弥太との戦いの場においても、忠度の文武二道にすぐれていたことがあざやかに描かれているが、平家物語・薩摩守の最後の本文を殆どとり入れており、世阿弥の花伝書にある「源平などの名ある人の事

を花鳥風月につくりよせ」を余すところなく發揮している名曲である。

先日も神戸湊川神社能楽殿において、藤井徳三師の「忠度」の能を拝見したが、前段の忠度の化身である老翁が風雅の道を説きながら、一木の桜に心を通わし、「もののあわれ」を表現する泌々とした演技の深さと、歌道に心する者の妄執、そして、武人としての忠度のすさまじいまでの心意気は、右肘を肩のもとよりふっと打ち落されても、なお、左の御手にて六弥太取って投げ、念仏唱えて、あえなく散りゆくさまが、能のすくない所作の中で力強い表現として観客の心を捉えた。まさに「能よければ何よりもおもしろし、是ことに花やかなるところありたし」と申された世阿弥の真意を立派に演ぜられ、心充ちて拝見したことであった。名曲と名演技の然からしむるところである。

忠度の勇武を讃え、明石市には忠度塚、右手塚があり、その名も忠度町・右手町として残されていたが、現在では人丸山柿本神社の下に立派な天文台が建てられ、忠度町は天文町と改められて、右手塚は天文町一丁目となり、忠度塚は天文町二丁目となって、「忠度」の名は消え、歴史を知るよすがはまたも遠くなっていた。

神戸市駒林町にある忠度の腕塚は、狭い露路を入ると、立派な石塔の上部だけがわずかに板塀の中に見られるだけで全貌はわからないが、老婆が一人、燈火を絶やさずまもっていた。露路の角には「うでづか」と彫られた石柱がたてられている。しかし、合戦のあった場所などから考えると、古蹟としては明石市に存在する方が妥当ではなからうか。

知盛

「知盛の発言の重さ」は、平家の大黒柱である清盛の薨後、時を待たないでおきた源平の戦いにおいて、頼むに足る武将の風格を示している。平知盛は正室時子を母とし、清盛の四男として仁平二年（一一五二）に生まれ、寿永四年（一一八五）すなわち文治元年三月二十四日、三十四才で壇浦合戦において平家一門と運命を共にし、入水して果てる。官位は従二位・武藏守左兵衛佐・左兵衛督・征夷大將軍・權中納言である。

平家物語において知盛が登場する巻は左の通りである。

- 巻一 御輿振 みこしより 都の西南の陣を固める
- 巻二 西光誅 さいこうがしら 行綱の知らせにより平家追討の主謀者を囚える
- 巻四 橋合戦 はしがっせん 大將軍として二万八千騎を下知する
- 巻四 宮最後 みやのさいご 全 右・勝利をあげる
- 巻四 三井寺炎上 みいでらえんじょう 大將軍として一万余騎を指揮し勝利をあげる
- 巻五 五節 ごせつ 大將軍として二万余騎で近江源氏を攻め落す
- 巻六 須俣合戦 すまたのかっせん 大將軍として三万余騎をもって東国源氏を討ち、三河にて勝利をあげる
- 巻七 主上都落 しゅじょうみやごち 大將軍として三千余騎を率い山階に向うが都に呼び返さる
- 巻七 忠盛都落 ただのりのみやごち 知盛の申状により三人の東国武士の下向を許される
- 巻八 水嶋合戦 みずしまのかっせん 大將軍として千余艘を指揮し大勝利をあげる
- 巻八 太宰府落 たさいふおち 源氏攻め寄すと聞き、平家主上を奉じて海人小

平家物語と修羅能について

船に召すを、知盛卿の国長門の道資大船百余艘を奉り四国に渡る

巻八 法住寺合戦

木曾義仲より宗盛に和を請うが知盛反対する

巻十 二度懸

生田森の大將軍

巻九 坂落

生田森の大將軍

巻九 武藏守最後

戦に敗れ子息知章を失う

巻十 院宣請文

弟重衝と三種の神器の交換に反対する

巻十一 壇浦合戦

船軍で知盛下知す。心替りの阿波民部重能を

巻十一 先帝身役

切らんとすれど宗盛ゆるさず

巻十一 内侍所都入

知盛最後まで平家の武将として努力する

平家物語に知盛が登場してくるのは、巻一の御輿振の項に、父清盛の命により、都の西南を固めて山の僧兵に対した時からであるが、大將軍として平軍を指揮し、源氏と戦い勝利を挙げているのは、橋合戦・須俣合戦・水嶋の合戦などがある。しかし、実戦の場において、知盛の発言が平家一門の中において大きな力となってくるのは、巻七・忠度の都落の頃からである。

去んぬる治承四年七月、大番のために上洛したりける畠山の庄司重能・小山田別当有重・宇都宮左衛門朝綱、寿永まで召し籠められたりしが、其の時既に斬らるべかりしを、新中納言知盛卿申されけるは、「御運だに尽きさせ給ひなば、これら百人千人が頸を斬らせ給ひたりとも、世を取らせ給はん事難かるべし。故郷には妻子所従等いかに難き悲しみ候ふらん。もし不思議に運命開けて、又都へ立

ち帰らせ給はん時は、ありがたき御情でこそ候はんずれ。ただ理をまげて本国へかへし遣はさるべう候ふらん」と申されければ、大臣殿「此の儀尤も然るべし」とて暇を賜ふ。

この、知盛の大乗の心境はどこから発したのであろうか。時すでに法皇は平家を見捨てて鞍馬に御幸なり、主上は都を落ちられ、それに伴って維盛も都を後にし、忠度・経正・池殿など平家一門は悉く主上を奉じて西国に下ることになる。平家の運命にあかるい日光は射しそうにもない。しかし、清盛亡きあと宗盛を助けて平家一門を支えてゆかねばならぬ。巻七・池殿都落の段に、「落ち行く平家は誰々ぞ。」として、平家一門の生命ある武將の名が書き連ねられているが、都を捨てて落ち行く現実から目をそむけることは出来ない。こうした中において、三人の東国武士に対する知盛の処し方は、まったく私の感情を脱し、平家一門の滅びた後もなお残るであろう恩情ある美談である。富倉徳次郎氏も申されておられるように「それは平家の運命に対して一つの諦念を持ち、しかも悲運の末路を美しいものとしてゆこうとする態度」としてうけとめられるのである。

巻十・院宣請文の段においても、生母二位尼の悲しみを目前にし、因われの弟重衡に思いを馳せ乍らも知盛の発言は平家一門の運命を決する重大なものである。

新中納言知盛の意見に申されるのは「三種の神器を都へかへし入れ奉たりとも、重衡をかへし給はらん事ありがたし。ただはばかりなく其の様を御請文に申さるべうや候ふらん」と申されれば、大臣「此の儀尤もしかるべし」とて、御請文申されけり。

一門の都落以後においては、宗盛を御大将としながらも、事あるごとに知盛の発言は大きく平家を左右している。やがて、清盛直系の孫、維盛が新宮の沖で入水し果て、藤戸・屋島・志度浦の合戦にも敗北した平家は、四国・中国の者どもにも叛かれ、平家の勢は落ちて千余艘、唐船が少々あるのみで、源氏の舟は三千余艘であった。

時は寿永四年(一一八五)三月二十三日午刻、壇浦合戦は始まった。

——(前略)——さる程に、源平両方陣を合はせて時をつくる。上は梵天までも聞え、下は堅牢地神も驚き給ふらんとぞ見えし。新中納言知盛卿、舟の屋形に立ち出で、大音声をあけて、「天竺・震旦にも日本我が朝にも双び無き、名將勇士といへども運命尽きぬれば力及ばず。されども名こそ惜しけれ。いつの為に命をば惜しむべき。少しも退く心あるべからず。是のみぞ思ふこと」と宣へば、——(後略)——

最後の合戦とみられる巻十一・壇浦の戦においては、この言動が示すように知盛は事実上の大將軍である。先々より覚悟をし、平家の最後を飾るべく、まことに限りある命を認識した武將の言葉として、あつぱれである。しかし、戦は平家に利あらず、熊野別当湛増・伊予の河野の四郎通信だけでなく、長く平家のために忠誠をつくし、共に戦ってきた阿波民部重能の心替りによって、平家の謀は源氏の知るところとなり、ついに源氏の兵共が平家の舟に乗り移りはじめたので、新中納言知盛卿は、急ぎ御所の御舟に参り、「世の中は今はいかに見え候。見苦しき物共皆海へ入れさせ給へ」と言つて、ともへに走り廻り、はいたり、のごうたり、塵ひろひ、手づから掃除をせられた。女

房達は「中納言殿、さて軍はいかにやいかに」と問ひ給ふと「めづらしきあづま男をこそ御覽せられ候はんずらめ」とてからからと笑われた。全軍の指揮と主上の守護、自分の死を目前に控えながら、手づから掃除をする沈着な姿は、平家の他の人たちには見られぬ知盛の人間像を鮮やかに描き出している。そして、主上や二位殿の御身投を見届け、わが身も海底の人となるのである。

卷十一・内侍所都入ないしどころみやこいり

新中納言知盛卿「見るべき程の事をば見つ、今は何をか期すべき」とて、乳母子の伊賀平内左衛門家長を召して、「日比の契約をば、たがへまじきか」と宣へば、「さる事候」とて、中納言殿にも鎧二領着せ奉り、我が身も鎧二領着て、手に手を取りくみ、海にぞ沈み給ひける。是を見奉つて、二十余人の侍共統いて海にぞ沈みける。

さて、能において、「知盛」をシテとした曲に、「碇潜」と「船弁慶」がある。船弁慶は五番目物として上演されるので、修羅物の「碇潜」のみをとり挙げる。能では、前段漁翁が能登守教経の奮戦を語り、力及ばず源氏の兵を両脇に挟んで入水した最後の有様を語つて、僧の回向を語つて消え失せる。中入り後は、知盛の亡霊が海上にあらわれ、修羅道におちた現在でも、源氏の兵と戦っている有様を見せた後、船の碇を兜の上に戴いて海底に飛んで入るのである。

しかし、平家物語では家長が、中納言（知盛）にも鎧二領着せ奉り手に手を取りくんで海に沈んだとあり、卷十一・能登殿最後の段で、「平中納言教盛、修理大夫経理、鎧の上に碇を負ひ、兄弟手に手

を取りくみ海にぞ沈み給ひける」とあり、碇を負つて沈んだのは知盛ではなくて能登殿となっているが、大綱えいや／＼と引上げて兜の上碇をいただくほどの武将を、能作者は知盛に仕立てたかつたのかも知れない。本曲には前段に修羅の語りがあり、後段にも修羅の合戦の所作がある。しかも、前段の人物と後ジテは異なった人物である。したがって、全体の流れの中に修羅が二つあるので、不統一で高まりがない。余り演能されない曲であるが、一度大阪能楽会館で拝見した。観能していて前段の能登殿を知盛と錯角して謡本を見直したことであった。

知盛は平家物語に卷一から卷十一まで登場して、平家一門の中心となり、武将としての叡智と統率力を持ったすぐれた人物として描かれているが、能においては、知将としての知盛を表現したものとなっていない。

また、知盛の人間像をうかがうに、子息武藏守知章を失つた折のこととがあるが、それは、能「知章」の折に触れることにする。

通 盛

平通盛は清盛の甥にあたり、父は忠盛の三男として、兄清盛と共に平家の隆盛を築いた教盛である。弟の能登守教経は、知将としての知盛とならんで、平家方にとっては勇将として得がたい実戦の勇士である。壇浦の戦いに敵舟に乗り移つて戦い、今は最後と心に定めた教経は、死出の旅路の道づれに二人の敵を両脇にかいはさみ、そのまま海に入るさまは、平家の勇将にふさわしい凄烈な死である。時に二十七才である。

通盛は教盛の長男として生まれ、藤原資憲女を母として、従三位、能登守、越前守、常陸介、中務大輔、左兵衛佐、中官亮となつたが、寿永三年二月七日、一の谷の戦いで討死をした。行年三十才である。この時討死した平家の公達は十人にのぼる。弟の業盛をはじめ、忠度・師盛・知章などである。

平家物語の中で通盛が最初に登場するのは、巻五・奈良炎上の段である。

入道相国南都の騒動を且々靖めんとて、瀬尾太郎兼康を大和の国検非所に補せらる。「相構へて衆徒は狼藉を致すとも、汝等は致すべからず。物の具なせそ。弓箭な帯せそ」とて、遣はされたりけるを、南都の大衆か様の内儀をば知らずして、兼康が余勢六十余人揃め取つて一一に頸をきり、猿沢の池のはたにぞ懸け置いたりける。入道大きに怒つて、「さらば南都をも攻めよや」とて、大將軍には、頭中將重衡・中宮亮通盛、都合其の勢四万余騎で南都へ発向す。―(後略)―

この時はじめて大將軍として勝利を挙げる。次に、巻七・清水冠者の段では左のように記されている。

さる程に、木曾東山・北陸兩道をしたがへて、五万余騎の勢にて既に京へせめのぼる由聞えしかば、―(中略)―

まず木曾冠者義仲を追討して、其の後兵衛佐を討たんとて、北陸道へ討手をつかはす。大將軍には小松三位中將維盛・越前の三位通盛・但馬守経正・薩摩守忠度―(中略)―以上大將軍六人、しかるべき侍三百四十余人、都合其の勢十万余騎、寿永二年四月十七日の

辰の一点に、都を立てて北国へこそおもむきけれ。―(後略)―
やがて、火打合戦となるが、城の内の平泉寺の長吏・斎明威儀師なる人の返忠によって、船がなくなつていたさらに日を送つていた平家の大軍は、柵を切り落して勝利を挙げる。

同年五月八日、加賀国篠原に勢ぞろいし、大手の大將軍には小松の三位維盛・越前の三位通盛、その勢七万余騎で加賀と越中の境にある砥浪山へ向かい、俱利伽羅峠に源平兩方陣をしき、その距離は三町ばかりであったが、その日は両軍進まず、やがて日も暮れた。源氏の兵の擲手の勢一万余騎が俱利伽羅の堂の辺に廻り合い鬨の声をどつとあげ、それに木曾殿大手より鬨の声を合はす。松長の柳原・ぐみの木林にひかえていた一万余騎の勢も、今井の四郎が六千余騎も同じく鬨の声を合せたので、前後合せて四万余騎がわめきさけぶ声は、山も河もただ一度に崩れるかと思われ、平氏の人達は無惨な敗北をする。その時のことを、平家物語では、巻七・俱利伽羅落の段で

―(前略)―案の如く平家次第に鬨うはなる、先後より敵は攻め来たる、「きたなしや、返せや返せ」といふ族多かりけれども、大勢の傾きたちぬるは、左右なうとて返す事かたければ、俱利伽羅が谷へ我先にと落しける。まっ先に進んだる者が見えねば、「此の谷の底に道のあるにこそ」とて、親落せば子も落し、兄が落せば弟も続く。主落せば家の子・郎等落しけり。馬には人、人には馬が、落ち重なり、さばかり深き谷一つを平家の勢七万余騎でぞ埋めたりける。巖泉血を流し、死骸岳をなせり。されば其の谷のほとりに、矢の穴刀の疵残つて今にありとぞ承る。―(中略)―平氏の大將

維盛、通盛希有の命生きて、加賀の国へ引き退く。七万余騎が中より僅かに二千余騎ぞ遁れたりける。

大將軍維盛と通盛は、まさに稀有の命を得て、加賀国篠原に陣をとり、人馬の息を休めた。五月廿一日に義仲の軍が攻めよせて、白昼に一戦を交えるが、これまた傷ましい敗北におわるのである。巻七「実盛最後」の結びの文に、「去ぬる四月十七日、十万余騎にて都を立ちし事からは、何面なほおもてを向かふべしとも見えざりしに、いま五月下旬げじゆんに帰り上るには、其勢僅せいわづかに二万余騎（後略）——と記され、京都の平氏一門の人々にとつて、この大きな打撃は致命的なものであった。

木曾義仲は越前の国府について、叡山の勢力を味方につけるため、覚明の意見によって牒状を書かせて送った。叡山では色々検討した結果源氏に味方する旨の返牒を出した。平氏も叡山に願書を送ったが、時すでに遅くて叡山は受けつけなかった。平家は諸国の源氏に備え、知盛・重衡は山階に宿し、通盛・教経は宇治橋を固め、行盛・忠度は淀路を守護したが、七月二十四日、宗盛御大將は知盛らの反対をおし切つて都落ちを決意する。法皇はいち早く鞍馬にのがれたので、仕方なく安徳帝御一人を奉じて一門の者は二十五日に京の都を落ちてゆくのである。

法皇は二十八日に都に還り、義仲・行家に平家追討の院宣を下し、八月五日には高倉院四宮を主上と定められ天下に二人の天皇が現出した。平家は、時忠以外は官を解かれ、安徳帝は岩戸の御所から宇佐へ行幸なさるが、維義の心替りにより、筑後の合戦で敗北した平家は雨の日を太宰府から徒歩で箱崎へ落ち、山賀城へのがれ、柳浦に着い

た。しかし、重能の援助で漸く四国の屋島に御所を移すことが出来た平氏は、ここでしばしの休息をとる事になるのである。京中での義仲勢の乱暴に法皇はついに征夷將軍の院宣をわたされに頼朝に追討を命ずる。木曾義仲が西国の平氏を討つ準備中に範頼と義経の大軍が攻め寄せたので、義仲は宇治橋をはずして防ごうとしたが、義経軍は宇治川渡河に成功する。義経軍は戦勝し、義仲は主従七騎となって、ついに粟津の原で打たれる。

この源氏同志の争いの間に、平家は力を得て十万余騎をもって福原に到着し、一の谷に城を構えた。やがて、都で平氏追討の準備を終えた源氏が三草山に攻め来たり、この合戦でも平氏は敗れる。平氏は平教経・通盛等に鴨越を固めさせ、知盛を生田森の大手の守りにつける。生田森で源氏が戦っているところに、義経は一の谷の後の鴨越から奇襲したので、平氏は総崩れとなり、源氏の勝利となつて、平氏は海上にのがれる。一の谷は落ち、平氏の公達、通盛・業盛・忠度・経正・敦盛など十人、源氏の方に切りかけらるる頸ども二千余といわれた。

巻九・武蔵守最後の段に、通盛の最後が記されている。

越前のさかみ三位通盛卿は山の手の大將軍にておはしけるが、——(中略)

——弟能登守にははなれ給ひぬ。心静かに自害せんとて、東に向かひて落ち給ふ処に、近江国の住人佐々木の木村の三郎成綱、武蔵国の住人玉井たまのゐ四郎資景、彼此七騎が中に取り籠めて、遂に討ち奉る。其の時までは侍一人付き奉りけれども最後の時は落ち合はず。

通盛の愛妾小宰相の局は海にのがれたが、通盛の侍くんだのたきぐちともかずの君太滝口時算

から通盛の討死のことを聞き、とかくの返事もなさらず衣をかづいて泣き伏され、この話を聞いた七日の夕方から十三日の夜までは起きあがりもなさらなかった。翌十四日、屋島へ着こうというその夜中すぎまで横になっておられたが、夜も更けて船の中も静まったので乳母と色々語り合われ、乳母がついまどろんでいる隙に、忍び声に念仏百べんほど唱えられ、「南無」と唱える声とともに海に身を沈められたのである。

小宰相の局については、巻九・小宰相の段に

此の北の方と申すは頭刑部卿則方の女、上西門院の女房、官中一の美人、小宰相の局とぞ申しける。此の女房、十六と申しし春の比、女院、法勝寺へ花見の御幸のありし時、通盛卿、その時は未だ中宮亮にて、供奉せられたりけるが、此の女房をただ一目見て、あはれと思ひそめけるより、其の面影のみ、身にひしと立ち添ひて、忘るる隙もなかりければ、歌をよみ、文を尽くし給ひしかども、玉章の数のみ積もつて、取り入れ給ふ事もなし。既に三年になりしかば、通盛卿今を限りの文を書いて小宰相の許へ遣はす。

この文が女院の目にとまることとなり、女院のはからいで二人は結ばれるのである。三位はこの女房をたまわつて、互いに想い思われ、西海の旅の空、船の中までも離れず、ついに同じ道に旅立って行ったのである。

巻九・老馬の段においても、鴨越の麓、山の手を弟の能登守教経と共にかためていた折も、能登殿の仮屋に、小宰相を呼び寄せて、最後の名残りを惜しまれたが、能登殿に戦いのきびしさを教えられ、この

ことを諫められたので、すぐ物具をつけてお返しになられた逸話は、能の中にも取り入れられている。

平家物語巻九・小宰相の段の中で、小宰相局を「北の方」と呼んでいるが、それは誤りであることは先学の方達の指摘の通りである。

通盛の北の方は宗盛の娘で、延慶本・平家物語では「越前三位通盛ノ北方ハ屋島ノ大臣殿ノ御娘也、御年十二ニゾ成給ケル、八条女院養進テ通盛聲ニ取セ給タリケレドモ未ダ少クオワシケレバ近付給事モナカリケリ」とある。

能「通盛」は、修羅物であるが後段において愛妾小宰相と通盛の二人の亡霊があらわれて、愛し合ふ者が別れねばならぬ悲しさを語り、花の命の短かさを恨むが、やがて、僧の回向によつてともに成仏する。通盛の死も、小宰相の入水も平家のままに書かれているが、能では二人の男女の愛がまるで、夕陽に映えて、きら／＼と輝く茜雲のようには、はかなくも美しく照り映えて、亡霊ではなく、現実に男女が愛の哀れを語り合い、訴えている思いにかられる。そうした能「通盛」の後段の舞台は何度拜見しても心うたれる場面である。こうした劇的要素は、「平家のままに書く」ことによりながら、能の持つ幽玄の世界に人々を導く。世阿弥の云う「おもしろく、花やかなる」ところの味わいであろう。

(短大国文学科 講師)